

F. Scott Fitzgeraldの短篇にみる アメリカの夢と挫折（上）

丸 田 明 生

は じ め に

Scott Fitzgeraldと「アメリカの夢」は、主として*The great Gatsby*などを中心に既に多く論じられてきた。私はここに彼の短篇の主なるものの中から、その「アメリカの夢」をたどってみたいと思うのである。何故なら、それらの物語の主人公を、HemingwayのNick Adamsのように連ねることによって、そこにFitzgeraldの歴史をたどり、小アメリカ史を見るような気持ちにもなるからである。というのは、1920年代は、南北戦争以後アメリカが、産業主義のもとに何の挫折を経験することもなく発展し、その頂上をきわめて繁栄を謳歌したdecadeであり、又そのためにこそ内に不安と動揺をはらみながら、やがて1929年の大恐慌へと突走った時代だったからである。それ故に、そこには、集約されたアメリカ史がみられるといっても過言ではなく、私が「小アメリカ史」とのべたのもその謂である。Fitzgeraldが、まさにその時代のアメリカ文明の中心となった東部で、敏感にそれを呼吸し、彼のcriticismが、その諸作品となってあらわれたのも蓋し当然のことと言えよう。

(1)

“Basil: The Freshest Boy”(1928)の主人公Basilは、Marius

Bewleyが、その*The Great Gatsby*論の中で、アメリカの夢を追う、アメリカ人の典型としてのGatsbyの前身として引用したa young bee hunterを、Gatsbyと同じくforefatherにいただくとみて一向差し支えない人物であろう。ところで、少し長いが、1836年に出版された*Col. David Crockett's Exploits and Adventures in Texas*の中の、そのa young bee hunterについての記述を引用してみよう。

I thought myself alone in the street, where the hush of morning was suddenly broken by a clear, joyful, and musical voice, which sang....

I turned toward the spot whence the sound proceeded, and discovered a tall figure leaning against the sign post. His eyes were fixed on the streaks of light in the east, his mind was absorbed, and he was clearly unconscious of anyone being near him. He continued his song in so full and clear a tone, that the street re-echoed....

I now drew nigh enough to see him distinctly. He was a young man, not more than twenty-two. His figure was light and graceful at the same time that it indicated strength and activity. He was dressed in a hunting shirt, which was made with uncommon neatness, and ornamented tastily with fringe. He held a highly finished rifle in his right hand, and a hunting pouch, covered with Indian ornaments, was slung across his shoulders. His clean shirt collar was open, secured only by a black riband around his neck. His boots were polished, without a soil upon them; and on his head was a neat fur cap, tossed on in a manner which said, "I don't give a d—n," just as plainly as any cap could speak it. I thought it must be some popinjay on a lark, until I took a look at his coun-

tenance. It was handsome, bright, and manly. There was no mistake in that face. From the eyes down to the breast he was sunburnt as dark as mahogany while the upper part of his high forehead was as white and polished as marble. Thick clusters of black hair curled from under his cap. I passed on unperceived, and he continued his song....¹⁾

これはまさに汚れを知らぬ少年の、青空に向かって立つ、希望に燃えた姿であり、我々はこれがBasil少年と重なり合うイメヅをどの程度持ち、時間の距たりが重なり合わない部分をどれだけつくったかを考えていきたいと思う。

同じ東部の学校に、同じ中西部の町からやってきたBasilとLewisは、あらゆる点で異なってきた。Lewisは学校生活をあまり好まなかったが、Basilは楽しくやっていた。Lewisは裕福で過保護の家に育ったため、この東部の学校での生活に *misery* と *homesickness* を味わっていた。一方Basilは寄宿生活をエンジョーイしていた。しかしBasilは、フットボールの選手であることなどもあって、Lewisからみれば、その人気とやや思いあがった感じに嫌悪を感じ、折あれば彼に一泡ふかせてやろうと思っており、みんなを唆かせて彼を村八分にしようと企んでいたのである。そうしたある日、次のような文面が学生新聞にみられた。

If someone will please poison young Basil, or find some other means to stop his mouth, the school at large and myself will be much pleased.²⁾ (57)

この書出しの中に、我々は19世紀後半から顕在化し始めた、アメリカの「競走の世界」を垣間見る心地がするが、Basilのfreshな姿に、まだ

- 1) Marius Bewley: "Scott Fitzgerald's Criticism of America" in A. Mizener, ed. by: *F. Scott Fitzgerald*, p. 128.
- 2) M. Cowley, ed. by: *The Stories of F. Scott Fitzgerald*, V. Six, p. 57. 以下引用文の末尾の数字は、上掲書同巻の頁をあらわす。

我々はさきに引用したa young bee hunterの面影をみることができよう。

さて、やがてBasilは、彼のところへDoctor Baconからの使いとしてやってきた、風采のあがらない、ちびの学生に、馬鹿にされた口をきかれて仰天する。危うく彼を殴りつけるところだったが、Brick Walesという凄味のある頑強な学生の名前を出されてそれでもできないまま、Bacon先生のところへ連れて行かれるのである。そこで彼は、成績の振わないことと同時に、苦しい生活の中から学校にやって下さっているお母さんのことを思え、と言われるのだが、彼に強い衝激を与えたのは自分の家の経済状態に触れられたことだった。

Basil's spirit writhed with shame, not at his poor marks but that his financial inadequacy should be so bluntly stated. He knew that he was one of the poorest boys in a rich boys' school.(60)

ここで彼は、15才の少年ながら、恥辱を強く味わわれる。敏感な感受性から、彼は誇りに人一倍の反応を示したものといえるであろう。そうしてここで注目すべきことは、Basilの関心が、学生としての本文である成績へのそれではなく、「金」への執着であるということである。それは、彼の別の短篇“Winter Dreams”のDexter Green少年と同じように、「金」こそはすべてのものに還元できる、というアメリカのこの時代を敏感に感じとっているからに外ならないであろう。そして「金」こそが、成功と幸福に連なる唯一の道であるということ。大浦暁生氏は次のようにいう。

ではこの「幸福」は(アメリカ人にとって)何によって実現されると考えられるだろうか。ここにはアメリカ社会の本質的人格にふれる問題が横たわっている。きびしい宗教的戒律を課しながらも、その一方で世俗的世界の拡大を奨励したピューリタニズム、実用を何よりも重んじる一種の合理主義にもとづいたプラグマティズム——これらさまざまのものが絡み合っ

もし出すアメリカ固有の精神状況は、幸福が何よりも世俗的欲望の充足にあると考えた。富、権力、性、地位、名誉などが皆この「幸福」と結びつく。だが、資本主義体制を経済的基盤とするアメリカ社会にあって、これらすべての基礎をなすものは物質的富であり、物質的価値の基本的換算単位としてすべての物が交換できる「金銭」こそ、この栄光ある「成功」のもっとも鮮明で具体的な象徴にほかならない。³⁾ (下線筆者)

ここに述べられていることは、Basilが何よりも先ずその若い心で感じとっている現実であった。彼はこの「金」に関する恥辱をいつかは跳ね返してやる、と決意しながらも、現在の状態では四面楚歌であった。

さてBasilは劇にあこがれていた。彼はBroadway に行ってみたかった。Quaker Girlという出し物と一緒にしてくれる仲間を探したが、彼に対する反感もあって皆彼の申し出を断わってしまう有様であった。みじめな気持ちで学校を出るBasilは、Lewisが彼の仲間に、この件のことで、それみたことかと彼を嘲笑うのを耳にするのであった。

しかし、Basilの中に何か憎めない性質をみたDoctor Baconは、フットボールのコーチで、歴史の教師であるMr. RooneyをBasilにつけてNew York にやるのを許可したのである。Mr. Rooney には彼自身の目的があったようで、New York に着くや否や、彼はBasilを信用すると言ってどこかへ行ってしまった。Basil は一人で観劇することになるのだが――。

ところでRooney先生は、New Yorkへの汽車の中で、Basilの授業中の態度について諭すように注意したのだった。

“You oughtn't to get so *fresh* all the time. A couple of times in history class I could just about have broken your neck!” “ . . .you don't have any nerve. You

3) 講座 アメリカの文化 3 「機会と成功の夢」 p.262-263.

could play better than a lot of 'em when you wanted, like that day against the Romfret seconds, but you lost your nerve?"(70)

Mr. Rooneyの言うことも尤もだとBasilは反省する。彼は自分があまりにも自己本位に行動し、それ故に他人がそれについてどういう感じを持つかを考えなかったことに気づくのである。彼は消沈しながら反省する。そしてその反省する心が、又Mr. RooneyのBasilの中にみた「ある憎めないもの」なのだが、それがBasilの延長線上にある主人公にどのような結果をもたらしていくか、それがこれから問題となっていく事柄の一つである。

今、Basilは一人になると、ポケットに放り込んでいた母からの手紙を出してみる。それは、祖父や母と一緒にヨーロッパで学校の残りを過してはどうか、という手紙であった。Basilは狂喜した。これで自分は再びあの面白くもない学校に帰っていかなくてもいいんだ、と彼は思う。

その中に幕間に外に出たBasilは、そこに待っていたMr. Rooneyの変わった姿を見てびっくりしたのである。ほんの四時間のうちに、Rooney先生はすっかり別人のようだった。Basilは思う。

How, in the short space of four hours, Mr. Rooney had got himself in such shape is explicable only by the pressure of confinement in a boys' school upon a fiery outdoor spirit. Mr. Rooney was born to toil under the clear light of heaven and, perhaps half-consciously, he was headed toward his inevitable destiny.(74)

Mr. Rooneyは、少年達のフットボールの監督として一生を何の大した変化もなく送るべく運命づけられているのであろう。学校にはBasilの付添いという名目でNew Yorkにやってくるしながら、やや粋な服に着換えて、一人この大都会の中に消えていったMr. Rooneyには、どんな目的があったのであろうか。そしてやがて肩を落として帰ってきた彼の中に、Basilは、Rooney先生の今日一日にかけた夢の喪失と、それを一つの材

料にしてBasilに教訓を与えるかの如き姿をみてとり、ひそかに人生の悲哀と苦悩の断面をみるのであった。そして又、この人生の苦悩は、Yaleの花形フットボール選手のTed FayにもあることをBasilは気づくのである。

Ted Fayは、Basilの見たステージに立ったある女優に恋していたが、彼女には一年以上も前に婚約した恋人がいてTedに心のすべてを許さず、Tedはそれ故に益々焦燥の焰を燃え立たせるのであった。二人の会話をステージの端近くで耳にはさんだBasilは考える。

“...life for everybody was a struggle, sometimes magnificent from a distance, but always difficult and surprisingly simple and a little sad.” (77—78)

これも又、Mr.Rooneyの場合と同様に、人生に対するdelicateな、しかもpatheticな観察である。M. Cowleyは、Fitzgeraldのこの洞察眼について次のように述べている。

They (Fitzgerald's short stories) are like sketches of a gifted artist, sharp and immediate in their perceptions, so that they bring us face to face with the artist's world. Even the worst of the stories have sudden insights that are like flinging back curtain from windows hidden in what had seemed to be flimsily decorated walls, while the best are suffused with emotion and their insights are everywhere.

4)

このCowleyの指摘の如く、少年Basilの中には、丁度Hemingwayの“Initiation”にも似た人生のdark sideへの開眼がみられるようである。そしてこれらは、この少年Basilの行く手にそっと暗い影を投げかけるものであったが、1920年代の若者の代弁者ともなっていく彼には若さと

4) M. Cowley, ed. by : *The Stories of F. Scott Fitzgerald*, Introduction, p. 27.

自信があった。この1920年代の若者に与えられた“confidence”を再び Cowley の分析によってみよう。

Yong men and women in the 1920's had a sense of reckless confidence not only about money but about life in general. It was part of their background: they had grown up in the years when middle-class Americans read Herbert Spencer and believed in the doctrine of automatic social evolution. No matter how rebellious and cynical the youngsters thought of themselves as being, they clung to their childhood notion that the world would improve without their help: therefore most of them felt excused from seeking the common good. Plunging into their personal adventures, they took risks that didn't impress them as being risks because, in their hearts, they believed in the happy ending. ⁵⁾

戦場をつぶさに見て、自ら重傷を負い、その深手から容易に立ち直れなかった Hemingway などは別として、アメリカにいる若者達の受けた教育とその社会思潮の中には、所謂“Social Darwinism”があり、世界はそれ自身、進化発展するという楽観論と、万物の霊長とたてまつられた人間性への信頼があった。そしてこの自身は、「フロンティア・スピリット」の後立てのもとに、Basil の夢をかき立てることになる。

Suddenly Basil realized that he wasn't going to Europe. He could not forgo the moulding of his own destiny just to alleviate a few months of pain. The conquest of the successive worlds of school, college and New York---why, that was his true dream that he had carried from boyhood into adolescence, and because of the jeers of a few boys he had been about to abandon it and run ignominiously up

5) *ibid.*, p.12.

a back alley!(78)

かくてBasilはEuropeへは行かず、ここでもう一度やり直そうと決心する。しかし、ここにはもう冒頭で引用した19世紀前半までのa young bee hunterの歌を口ずさむ、のどかな若者の面影はなく、それはいわゆる「陽のあたる場所」へ出ようとするきびしい若者の姿と変容する。Fitzgeraldが今一つ、Basilを主人公にして同様のsketchを行なっている短篇“*He thinks he is wonderful*”で述べている“*everything was a matter of effort*”(81)という、Benjamin Franklinに代表される「勤勉」の美德は生きているとしても⁶⁾、それは、19世紀後半以後は、「競走のための勤勉」ということに姿を変えている。——それは何故か。

アメリカ憲法にうたわれた「幸福の追求」は、19世紀前半までは勤勉による「開拓」によって達成されてきた。しかし、地理的フロンティアが消滅すると、その幸福の追求は、既成のアメリカの社会体制と密着し、その体制の中での「成功」というものに姿をかえざるを得なくなった。そしてそれは「競走」という形でしか達成されないのである。

Fitzgeraldは、意識的か否かは知らず、この体制の中で成功しようとした。あるいは、それより外に彼にとってとるべき道がなかったといえるかも知れない。Fitzgeraldが「成功の夢」と密着して考えられるのはそのためである。「開拓」の伝統を守り続けて、既成の社会秩序の束縛を嫌い、新しい天地に自らひとり生きる場所を求め続けたHemingwayと異なるのもその点である。そしてHemingwayとFitzgeraldが共に、アメリカ人読者に熱狂的に受け入れられたのも、1920年代のアメリカ人の中に同居したこの二つの「開拓」と「成功」をそれぞれ代弁したからに外ならない。そしてこのFitzgeraldの「成功の夢」は、当時のmiddle-Americanの直接の希望と夢につながり、Hemingwayの文学は、彼等に遠く遙かなる父祖の精神的基盤を思い出させたものとみることもできよ

6) Franklinのとなえたもう一つの大きな美德とされる「節約」は、1920年代になると「消費」の美德にとってかわった。

う。

(2)

“Basil: The Captured Shadow” (1928) においては、15才のBasilが、自ら劇の台本を書いて、それを成功させるまでの苦しい努力のあとがたどられている。第一章では、彼が徹夜の苦しみの中で如何にしてシナリオを書きあげたかが語られ、その台本の一部が抜書きされている。そして、そのような彼の努力にも拘らず、男の主演は途中で止めてしまうし、又女の主演であるEvelynも東部へ行くために止めたいという。そこでBasilは、Evelynの弟が「おたふく風」にかかるように計画し、彼女の一家が東部へ行けないようにしたため、Evelynも劇に留まり、遂にその劇を見事成功に導くことができたのである。

しかし劇が上演された後、Basilは何となくうつろな気持ちだった。母は彼に話しかける。

“Well. I thought it went very well indeed. Were you satisfied?” He didn’t answer for a moment.

“Weren’t you satisfied with the way it went?”

“Yes.” He turned his head away.

“What’s the matter?”

“Nothing,” and then, “Nobody really cares, do they?”

“About what?”

“About anything.” (126)

「誰も本当に他人のことに對して気を使ってはくれないものだ」というBasilの言葉は、人間性に対する悲哀に満ちている。それがアメリカの社会制度にどの位原因しているのか、人間性そのものに何パーセント由来するのかBasilは勿論知らない。しかし、Fitzgeraldの「夢」の背後にぴったりと影の如くつきまとう人間への淋しい眼差しは、Rooney先生やフットボールのTedの場合と同様、ここでも変わらない。

しかし彼の心は、自分の劇の成功のためとは言え、小さなHamに、彼

の姉を劇に出させたいばかりに「おたふく風邪」にかかっている遊び相手のことを知りながら、いや知っているが故に、その友達のところへわざわざ出向かせたことを思うと心が痛むのであった。それは母には言えない悩みであった。自らが生きんがために——ここでは劇を成功させんがために——一人の子供に対して罪つくりのことをしたBasilの心は、やはり、途中で彼の劇の主役を投げ出したり、又投げ出そうとした者達と少しも違わないではないか、というこの生の業に、ひとりやり場のない苦しみを味わうのであった。即ちBasilは、人の心のegoをみて、憂鬱にとりつかれると同時に、自分の心のegoにも目を向けさせられて、啞然とするのである。このようなことは典型的なfrontier's manであるHemingwayの作品、特に初期の作品にはみられないことである。最近、Fitzgeraldが新たな評価を得つつあるといわれるのも、彼のこの自己に向けられた眼によるものなのであろうか。

Fitzgeraldのこのやさしい、他人に対する思いやりの心は何に由来するものか、M. Cowleyもそれに疑問を投げかけて次の如く言っている。

There was a hard core in his character---call it mid-Western Puritanism if you will, or middle-class Irish Catholicism, or simple obstinacy---and it kept him from evading his obligations to his family and his creditors and his talent as an artist. ⁷⁾

しかし、当時のアメリカにおいて、このような清教徒的罪悪感ともいふべきものをもつことは、どのような意味をもったであろうか。私見によれば、それがFitzgeraldの徹底的な「弱さ」の一部を形成し、彼自身の生涯を決定し、彼の告白的エッセイ*The Crack-Up*の中で、「私は敗者の権威でしゃべる——ヘミングウェイは勝者の権威でだ。もはや同じテーブルに向い合って座ることはできない」⁸⁾と言わしめることになる

7) M. Cowley, ed. by: *The Stories of F. Scott Fitzgerald*, Introduction, p. 30.

8) *The Crack-Up*, Paperback Edition, p. 181.

のである。

今ここに、以上の観点について一つの例をあげてみたい。それは Fitzgerald と殆んど同時代に T. Dreiser (1871—1955) によって書かれた二つの有名な長篇 “The Financier” (1912) の主人公 Frank Cowperwood と、“An American Tragedy” (1925) の主人公 Clyde の比較である。Cowperwood は、魚屋の店先の水槽の中でイカが少しずつイセエビに食われていくのを見て、人間の世界もこの自然界の法則にあてはまる弱肉強食の世界であるという、彼が常々考えていた疑問への解答を得、終極的には人間は「金」によって他の人間を食うことになるのだ、という理解に達する。彼の人並みはずれた事業の才により、彼はいわゆる Darwinism を地でいく典型的な勝者として金を手に入れ、そして女をそれによって次々とものにしていく。彼にはもはや、美德を保ち、公共の福祉も考えながら富を築いていく初期アメリカ人の姿はない。彼の場合、一見公共的と思われる行為も、実は醜い打算の結果である。

Clyde の場合も、いわゆる「成功者」になるという野心においては Cowperwood と変わりはない。そのため彼は妊娠した恋人を抹殺しなければ Sondra を獲得し、富を手中におさめ、陽のあたる場所に踊り出るといふ彼の野心は達成されない。しかし、いざ Roberta を溺死させようという瞬間になって彼は動揺する。そしてその煩悶の中でボートが転覆し、その偶然が決定的な結果を生むのである。そして彼は殺人犯として死刑に処せられていく。この二つの典型的な成功者と失敗者を通して Dreiser は、1910年から1930年にかけてのアメリカについて、決定的な事実を語っているように思われる。即ち、公金を流用し、贈賄によって富を蓄積し、又妻ある身で次々と他の女と関係をもっても罪悪感に悩むこともない、自己保存の本能が極めて強い Cowperwood のような男が成功し、それに対し、今や節約と勤勉だけでは成功が覚束なくなったアメリカの社会の中で、強い成功へのあこがれと誘惑に抗し切れず、罪悪感に悩みながら罪を犯し、又そのために内的矛盾に苦しみながら状況の推移に押し流されて敗北していく Clyde 的人間が失敗していくということ

である。Dreiserが、この物理的・化学的ともいえる人間の衝動や、生きる意志からくる人間の不毛性や悲劇性を、救いのないものとみたか否かは別として、20世紀初頭のアメリカ社会は、もはやPuritanismの力の及ばないところまで来ていたのである。そしてFitzgeraldに残るこのピューリタンの善意の甘さは、その善悪はともかくとして、もはや時代おくれのものになりつつあったのである。

(3)

それでは次に“Josephene: First Blood”の中に、Fitzgeraldがえがいた1920年代の女性をみとみることにしたい。

Josepheneは旧家の出である。彼女は友達Lillianと映画に行くとして、実はボーイフレンドTravisとLillianと彼女のボーイフレンドの四人でデートに出かけるのである。しかし、Travisが車の中で彼女にキスをしようとした時、彼女は最初の彼女の気持ちに反して彼のキスを避ける自分を発見する。それはTravisがJosepheneを自分の家に車で連れて帰ろうと思っているというのであった。彼女は言う。A man certainly doesn't respect a girl he can kiss whenever he wants to, and I want to be respected by the man I'm going to marry some day. (132)

こうして彼等と別れたJosepheneには、仕事を終えた後に感じるあのさわやかさがあった。彼女は、彼女の家の伝統を守ったという誇りがあった。しかし、彼女の心の中にはひそかに姉のボーイフレンドAnthony Harkerの面影が宿っていたことも事実であった。

Josepheneは気位が高く、男性なら誰でも一応は惹きつけられるものをもった16才の少女であった。しかし、16才の少女とは言い難い自負を持ち、姉が好意を寄せているにもかかわらずAnthonyに対する自分の気持ちを抑えることができない。しかし終に彼女は、家庭内にこの事に関して紛争を起こし、彼を断念すると宣言することになるのだが――。

しかし彼女は、Anthonyが出席するダンスに出かけてしまう。Anthony

は彼女をcuteだと思っているが、まだ子供だという目で見えており、彼女があまりseriousになることには迷惑を感じている。彼等の会話である。

“You’re so sweet,” she said.

“You’re a dear child.”

“I hate jealousy worse than anything in the world,”

Josephene broke forth, “and I have to suffer from it.

And my own sister is worse than all the rest.”

“Oh, no!” he protested.

“I couldn’t help it if I fell in love with you. I tried to help it. I used to go out of the house when I knew you were coming.”

The force of her lies came from her sincerity and from her simple and superb confidence that whomsoever she loved must love her in return. (138—139)

Anthonyは彼女を愛しているわけではない。しかしJosepheneは自分が愛している相手が自分を愛さなければ我慢がならないのである。いや、果してJosepheneはAnthonyを愛しているかどうか疑わしい。やがてAnthonyは彼に身を寄せてくるJosepheneを断わり切れずにキスをしてしまうのである。しかし、彼女のその仕草はAnthonyを彼女の足下に膝づかせるための誘い水に外ならなかったのである。

これを契機としてAnthonyはJosepheneの魔力に次第に引かれていくことになる。彼女はAnthonyを自分で呼び出しておきながら、彼が30分も遅れてくると我慢ならないという態度を示すのである。そして彼の気持ちがかくごころであることを責めるのである。Anthonyは、“I’ve never loved you and I never told you I did.”と言いながらも、やがて彼女と別れてみると、彼が如何に彼女の虜になってしまっていたかを発見し、彼女に対して自分がdesperate loveにあることを述べる速達便を出す始末であった。

これによって、JosepheneとAnthonyのこれまでの立場は逆転した。

Josepheneは自分が優位に立ったとみるや、最早相手を愛しはしない。否、それは先にも述べたように決して愛というものではなかったのである。彼女は手紙をこなごなに裂いて燃やしてしまった。彼女のprideは次のようにいう。No well-brought up girl would have answered such a letter ; the proper thing was to simply ignore it (145).

そして彼女は突然眠気をおぼえるのである。

しかし一旦燃え上ったAnthonyは、気狂いじみた様相を呈するようになり、いろいろの手段をもってJosepheneに近づこうとする。そして彼女の家ではとうとうたまりかねて、彼を西部に追いやることにしてしまう。一方Josepheneは、親の希望通り東部の学校へ向かって去っていくのである。彼女を取り巻く二人のboy friendのみじめな気持ちを一向に心ずる心とてなきが如く。

この作品もFitzgeraldの上流社会の女性に対するあこがれを、そして一面には失望を語っているように思われる。実のところ彼は、Josepheneのような女性をあこがれ、肯定しているといえよう。何故ならそれは、「アメリカの夢」に通じるからである。しかしFitzgeraldはJosepheneの危険性も又えがいている。彼女はCowperwoodの女性版ともいうべきものを多分に孕んでいるということである。我々は更にこの点を、“Josephene : A Woman With A Past” (1930)の中で、Josepheneの東部の学校での生活をとおして考察してみたい。

(4)

かくしてJosepheneはNew Havenにやってくることになる。彼女は既にsensationとscandalを経験した女になっていた。そして彼女の去年の夏のAnthonyとの事件は、男性の自惚れや尊大に冷水をかぶせるものにまでなっていた。しかしこのNew Havenで会ったDudley Knowltonなる人物は又彼女の興味をそそったのである。それは彼にAdele Grawという極めて仲のよいgirl friendがいたことによるのかも知れない。

Glancing at Adele, Josephene saw on her face an expression of

tranquil pride, even of possession (150). いつもaggressiveな Josephene に対して、Adele は落ち着いた確信に満ちている。そしてJosephene が彼女にKnowletonとengageしているのかと尋ねたのに対し、「まだそんなことは早すぎるし、私達は男女の間のhealthy friendshipを保っているのよ」という答がかえってきた時、Josepheneは心の動揺を抑えることができなかつたのである。

She was oddly interested. That two people who were attracted to each other should never even say anything about it but be content to “not believe in such stuff, ” was something new in her experience. . . Yet Adele seemed happy---happier than Josephene, who had always believed that boys and girls were made for nothing but each other, and as soon as possible.(151—52)

このAdeleがJosepheneよりしあわせに思われた事実にFitzgeraldの目は注がれているのである。1920年代のフラッパーの代表ともいふべきJosepheneをえがき、その生き方に共鳴しながらも、一方では古風ともいふべきAdeleのPuritan的伝統と心にその良さを見出さざるを得なかつたFitzgeraldであつた。そしてその考え方は又Clyde的Fitzgeraldともいふべきものであろうか。

1920年代は又youngとoldとの溝が大きく口を開けたことにその一つの特徴があるといえよう。Josepheneをその頂点とするフラッパー達がそれである。我々はこの作品においてもFitzgeraldが描き出した鮮やかな描写の中にそれを感じとることができるのだが、Cowleyの次の言葉に接する時に、更にその感を深くするのである。

They were truly rebellious, however, and were determined to make an absolute break with the standards of the prewar generation. The distinction between high-brow and lowbrow or liberal and conservative, was not yet sharp enough to divide American society: *the real*

gulf was between the young and the old. The younger set paid few visits to their parents' homes, and some of them hardly exchanged a social word with men and women over forty. ⁹⁾ (イタリックス筆者)

このように子が親のもとを滅多に訪れず、挨拶さえも交わさなかった程のギャップが生まれたという事実、これはそれ程ではないにしても太平洋戦争後の日本を思い出させるものがある。アメリカにはそれが20年前に訪れていたのである。Cowleyはliberalとconservativeの溝が、まだそれ程はつきりとしていなかったといているが、それもうなづけるところである。しかし我々はFitzgeraldの作品において、JosepheneとAdeleの対比の中にその溝を見るように思えるのである。

さて、以上の世代のギャップをつぶさに物語っているのが、娘達のダンスパーティーを全くおどおどと見守る母親達と、戦後の全く新しい空気を呼吸している娘達との対照である。Josepheneは、彼女に蜂の如く群がり集まる男達と交際し、キスをする。しかし彼女はそれに溺れるのではなく、それを足場にだんだんとのしあがっていく。彼女のそのエネルギーにはまさに驚嘆すべきものがある。その力はやはりフロンティアや成功の夢と軌を一にするものだと私はみたい。Marius Bewley も次のように言っている。

Historically, the American dream is anti-Calvinistic, and believed in the goodness of nature and man. *It is accordingly a product of the frontier and the West rather than of the Puritan Tradition.* The simultaneous operation of two such attitudes in American life created a tention out of which much of our greatest art has sprung. ¹⁰⁾ (イタリックス筆者)

9) M. Cowley, ed. by: *The Stories of F. Scott Fitzgerald*, Introduction, p. 12.

Bewleyのこの見解はまさに核心をついた洞察のように私には思われる。度々言及した如く、Josepheneは一方ではFitzgeraldのAmerican Dreamに外ならないからである。そしてそのJosepheneは、Knowletonのことに於いて、Adeleに決して譲ることができないのである。

JosepheneはKnowletonに問う。

“Are you engaged to her ?”

He stiffened a little. “I don’t believe in being engaged till the right time comes.”

“Neither do I, ” agreed Josephene readily.

“I’d rather one good friend than a hundred people, hanging around being mushy all the time.” (155)

このようにしてJosepheneはKnowletonに近づいていく。そしてその間にも彼女は次々と男達とplayするのであり、love affairをgameのように振舞っている。そうしながらもKnowletonの心を捕えることに執心し、Adeleのjealousyが、彼女の姉の場合と同じように起こってくるのに内心のよろこびを隠し切れないのであった。

兎角するうちに、彼女と同じ宿舎の女子学生達が、寮のきまりを破って男性を誘い入れたかどで謹慎を受け、Josepheneもその一人にさせられてしまう。彼女はその期間中、Brereton先生の甥のWaterbury とchapelに行く途中、階段でつまずき、そのはずみにWaterburyの腕の中に入ってしまったところを運悪くみつけれ、dullでpiggishな彼は弁解もなし得ず、遂に彼女は退学させられてしまう。ここにもさきに述べた世代間のgulfは甚だしいものであることを我々は悟るのだが——その無理解な処置に対して...all her (Josephene’s) feelings were directed against Miss Brereton, and the only tears she shed at leaving were of anger and resentment (164)、なのである。彼女は、

10) Marius Bewley: “Scott Fitzgerald’s Criticism of America” in A. Mizener, ed. by: *F. Scott Fitzgerald*, p.125-126.

生まれて初めてみじめさを感じはしたが、決して自分の行為を振りかえりみることはなかった。いわんや、道徳的罪悪感などみじんも感じはしなかった。Cowperwoodの場合と同様である。そしてそれは又他人に対してはsympathyを決して感じないということでもあった。

She had never felt any pity for the unpopular girls who skulked in dressing-rooms because they could attract no partners on the floor, or for girls who were outsiders at Lake Forest, and now she was like them---hiding miserably out of life.(165)

しかし、今彼女は初めてunpopular girlsの位置に落とされたかの如くであった。しかし彼女はフロンティアを取り戻し、アメリカの夢に向かって邁進しようとするのである。

フロンティアは又七転八起の精神である。しかし、これは過度に進む時、D. H. Lawrenceのいう「アメリカ人は殺し屋」という言葉と結びつく。そして実際にその例を我々はJosepheneにみると言うことができよう。彼女は弱き者、虐げられた者へは何の同情ももっていないからである。そしてこのようなフロンティアは、究極において“pride”と結びつき、humilityを根こそぎ取り去ってしまう性質をもっている。彼女の場合、Knowletonが自分に膝づかない初めての男性であることを知った時、自分の彼に対するものは“love”でなく、“pride”であることを知ったのである。そして作者も読者もJosepheneには愛が不毛であることを知るのである。そしてFitzgeraldは、Adeleのように男の子と仲のよい友達になれる女性こそ、真の愛を持つ女性であることも仄めかしているように思われるのである。

But, save in the very young, only love begets love, and from the moment Josephene had perceived that his interest in her was merely kindness she realized the wound was not in her heart but in her pride. She would forget him quickly, but she would never forget what she had learnt from him.

There were two kinds of men, those you played with and those you might marry.(169)

この一節は最終的にJosepheneなる人物をはっきりと浮き彫りにしている。彼女はKnowletonによってこのように学ぶものはあったけれども、やがて我々はシカゴの富豪の息子の肩に身をもたせかけて歩み去っていく彼女を見いだすのである。

JosepheneがたとえKnowletonのような男と結婚することを望んだとしても、一方では金持ちのplay boyと遊んでいる限り、彼女の論理は通らないであろう。Knowletonのような男性はAdeleのような女性を愛するであろうし、Josepheneのような女性を結婚の相手に選ぶことにも抵抗を感じるであろう。Fitzgeraldは、まだアメリカにKnowletonやAdeleに代表される「精神的なしあわせ」を求める人達が残っていることを暗示している。Fitzgerald自身は決してこの精神的なしあわせに満足できない最もアメリカ的アメリカ人であった。あてやかなJosephene的なものに対するaspirationをどうしても放棄することができなかった。Zeldaとの結婚もその一つの証拠である。このJosepheneのような上流社会の出であるZeldaの浪費癖のために、彼はアメリカの欲望の奴隷にならざるを得なかったと言えば酷であろうか。しかし我々はこの上流社会の持つ危険、いわゆる文明が円熟し、その頂きに達した世界のもつ必然的なmenaceを見せつけられる思いがする。それはアメリカへの呪いであり、そして又人間性への呪いともなってくる感がしないでもない。Fitzgeraldは人間性までは呪ってはいないであろう。しかし、逆に言えば、彼の中に果てしなく広がる「アメリカの夢」の追求の中に、我々読者ははからずもそれを意識させられるのである。

(5)

“Majesty”(1929)は、同じく女性を主人公にした物語だが、我々はその主人公Emily CastletonにJosepheneの成長した面影を見ることができるよう思う。彼女は次第に裕福になっていく家庭に育ち、新聞にも

名前の出る女優にもなり、ヨーロッパの地を青い鳥を求めて旅をした。She became “artistic”, as most wealthy as most unmarried girls do at that age, because artistic people seem to have some secret, some inner refuge, some escape. ¹¹⁾ (449)

彼女は芸術家肌の娘の常として、何かある秘密を持ち、内面的にかたくなになるところがあった。既に結婚した友人の紹介でWilliam Brevoort Blairと婚約し、そのことは新聞紙上にも発表されたが、Emilyは従妹のOliveに彼女の心中を語るのである。Williamを愛する気になれないと。Oliveは「結婚すれば愛するようになるものよ」というが、さていよいよ結婚式の当日、教会で花婿側が今やおそしと待っているうちに、花嫁がescapeしたことが知らされるのである。

Oliveは実はこのEmilyの婚約者Brevoortを愛していたのである。彼女はBrevoortが何から何まで自分にぴったりの共通点を持つ人物であることを感じていたのである。それでEmilyが失踪したのを知った時、彼女はBrevoortを真先に慰めたいと思ったのである。しかし、それは躊躇された。それで彼女は悲嘆にくれているEmilyの父Uncle Haroldになぐさめの言葉をかけるのである。

その内にもCambridgeからやって来たHarold Juniorの友人はダンスを始めている。Oliveは18才のHaroldにそれを止めさせる。世代の断絶はここにもあった。若者達は自分の欲することをするのが正しいと信じているかのようにであった。他人の気持ちや、周囲の状況を無視することが新しいことだと考えているようであった。やがてそこにBlairがやってくる。彼は悲しみに打ちひしがれているというよりもむしろ、この事件が新聞に出て自分の体面が潰れるのを恐れているのであった。そして突然Oliveに、「明朝、自分と結婚して欲しい」と言うのである。Oliveは怒りの涙を禁じ得なかった。その彼女の気持ちをBlairは理解しながら

11) M. Cowley, ed. by: *The Stories of F. Scott Fitzgerald*, Vol. Five, p. 449. 以下引用文の末尾の数字は上掲書同巻の頁をあらわす。

も次のように言うのである。“--- a man hates to lose the whole dignity of his life for a girl's whim?”(458)

Oliveの反応がないままに彼はあきらめて出て行った。しかしOliveは脱兎の如く彼を追いかけて“--- it's not too late for them to change their story if I telephone now! I'll say we were married to-night” (459), というのである。

真面目に、地道に育ってきた人間が、一旦人を愛するとなると、それは全くすべてを超越するものなのであろうか。Oliveの場合がまさにそのように思えるのである。それに対してBrevoortは、先の引用のようにdignityにしがみついているが、かつてのBasilのような瑞々しい、発刺とした元気はなく、凋落の色はかくし切れない。あまりにもあっさりとしてEmilyを諦めること自体に、かつてのfreshest boyの挫折がみられるのである。それは言葉をかえて言えば、そこに「アメリカの夢」の崩壊の第一歩があるのである。

やがて今は結婚したBlair夫妻は、Emilyの父Mr. Castleton から、ヨーロッパに行っていたEmilyを連れもどして欲しい、と頼まれる。Emilyは、パリから退去させられたGabriel Petrocobesco 王子の取り巻き連中の一人となっていたのである。Blairは、自分にはその力がない、と言って断わるのだが、外に適材がないかどで、Oliveと共にヨーロッパに出かけていく。彼等はパリについてCastletonのagentから、Petrocobescoの一行が、ヨーロッパのあちこちを点々としているようだ、と聞かされる。そしてアメリカの副領事に伴われてBudapestの警察をたずね、そこで彼等は一行が昨夜Sturmdropに向けて出発したことを知るのである。

BlairとOliveは一行を追ってBudapestのホテルの車でSturmdropに向う。やがて彼等がハンガリー国境をこえてCzjeck-Hansaに入ったことを知らされる。遂に一行に追いついた彼等は、EmilyがPetrocobescoと、その取巻き連中と一緒にいるところに案内される。Emilyは驚きながら彼等をみんなに紹介する。Emilyは以前の美しさは少しも失わず、相変わらず魅力をたたえていた。彼等はPetrocobescoの隙をみてEmily

にアメリカに帰るように説得する。しかしEmilyは鼻先で笑っているの
であった。

“His uncle was Prince of Czjeck-Hanza before the war,”
explained Emily, her voice singing her content. “Since then
there’s been a republic, but the peasant party wanted a
change and Tutu was next in line. Only I wouldn’t marry
him unless he insisted on being king instead of prince.”

(467)

この言葉が発せられるほんの少し前、Petrobescoは議会でKingにえ
らばれていたのであった。それによって彼女は、彼に結婚の承諾を与え
たのであった。Petrocobescoが“terrible little man”であったにも拘ら
ず——。

それから数年後、Blair夫妻はロンドンのCarlton Hotelのバルコニー
からCzjeck-Hanzaの王の行列の一行を見物している。Blair氏は彼の子
供達に問いかける。

“...Which would you rather do, baby---marry me or be
a queen?”

The little girl hesitated.

“Marry you,” she said politely, but without conviction.

“That’ll do, Brevoort,” said her mother. “Here they come.”

“I see them!” the little boy cried.(468)

ここには子供達がまだ親の影響下にありながら、その夢が如何に王と
女王へのあこがれにあるかが描かれている。“I’ll see them!”のEx-
clamation Markを見よ。これは、このようなstatusにあこがれるFitz-
geraldの夢であり、それが叶えられないで、Blairの立場でもはや手の
届かなくなったものを見守っているFitzgeraldの気持ちでもある。それ
は次の言葉が裏書きしているのである。

“I wonder if she likes it, Brevoort. I wonder if she’s

really happy with that terrible little man.”

“Well, she got what she wanted, didn't she? And *that's something.*”

Olive drew a long breath.

“Oh, she's so wonderful,” she cried---“so wonderful! *She could always move me like that, even when angriest at her.*” (469) (イタリックス筆者)

Fitzgeraldは、いわば第一次世界大戦後のアメリカの繁栄の波に乗ろうとした人々の象徴であり、更に言えば実業界での功名を志すアメリカ人グループの一員である。この“Majesty”の主人公Emilyは、*The Great Gatsby*の中で、Gatsbyの「アメリカの夢」の象徴であったDaisyであり、William BlairはGatsbyなのである。Gatsbyの夢は空しく消え果てたけれども、Blairの夢は今やrealityとしてではなくsymbolとして残されている。Czjeck-HanzaやEmilyはまだ「アメリカの夢」の残されているsymbolとしての「西部」であり、Fitzgeraldは、既に自分では手の届かなくなったその「夢」の獲得を、Blairをしてその子供達に託させているのである。それは華やかかなりしJazz Ageとアメリカの繁栄が、今や幻影となって過去に遠ざかりつつあることを暗示すると同時に、やがて子供達の手はその「夢」が再び戻り来ることへのFitzgeraldの祈りでもあるのである。

(1973. 3. 20)